講演2

漢方の効かせ方

東邦大学医学部東洋医学研究室客員教授・吉祥寺東方医院
三浦於菟

講演２では、東邦大学医学部客員教授で、東洋医学、漢方医学の第一人者である三浦於菟先生に、漢方の効かせ方についてお話しいただいた。

三浦先生は、漢方薬の基本を分かりやすく解説。「同病異治」と「異病同治」が漢方の治療法の特徴だとし、その理由として漢方薬が多種類の生薬で構成されているからだと説明した。また、東洋医学の疾病認識となる「証」について触れ、西洋医学との病態観と治療方法の違いを明らかにした上で、漢方には新しい医学の地平を開いていく力が秘められていると強調。東洋医学はこれからの医学だと語った。

日時：平成26年５月15日（木）15：00〜16：20	場所：大手町サンケイプラザ（301号室〜303号室）

漢方が伸びている理由

●平成から伸びた東洋医学会の会員数

本日は、漢方について、なるべく初歩的なことをお話ししたいと思います。

まず、漢方に関わっている日本東洋医学会の会員数は、いささか古い平成15年のデータですが、約１万人います。医師数全体からみると少ないものの、漢方医学の会員は近年、特に平成に入ってから急激に伸びてきました。そして平成６年頃をピークに、その後若干減少しています。

●なぜ東洋医学なのか

では、いったいなぜ伸びたのかについて、少しみていきましょう。

私は東邦大学で教える前は、日本医科大学にも勤務していました。そして平成12年に、東洋医学

を受診した100名の患者さんにアンケート調査を行いました。少し古い調査ですが、その結果をみると、東洋医学の受診患者さんで、西洋医学でも治療している人は22％で、それに対し約72％は治療していませんでした。つまり、東洋医学だけにかかっていたわけです。

それで、なぜ東洋医学なのかですが、次の質問で、「主訴の西洋医学治療に効果があったか」を聞きました。すると、62％が「無」で、28％が「有」との回答でした。３分の１近くの患者さんが「有」と答えたことは、少し意外でした。というのは、効果があったのであれば、東洋医学に来なくてもいいではないかと思ったからです。

さらに「西洋医学治療の満足度」を質問しました。ほとんどの人が西洋医学に「不満」を持っているだろうと予測していたのですが、「不満」は48％で、34％は「満足」との答えでした。これはいったいどういうことなのか、と思いました。

東洋医学の受診動機をみてみると、一番多い回答は「西洋医学は無効」という答えで延べ42人、続いて「西洋医学より良いから」が延べ32人、「西洋薬の副作用の心配」が延べ18人で続きました。副作用の心配が意外に少ないという印象を私は持ちました。

そこで気になる質問の「西洋医学に満足していたのに、なぜ東洋医学にかかろうとしたのか」に対する回答をみると、最も多かったのが「西洋医学より漢方医学が良い」という回答で、副作用の心配や実際に副作用があったという答えを上回っていました。

つまり、「西洋医学には一応満足しているが、もっといい治療方法があるはずだ。より良い治療を受けたい」という気持ちが、漢方医学に向かわせたのではないかと思われます。

要するに、漢方医学に向かう患者さんは、西洋医学に不満足だからというわけではなく、もっと良い治療があるはずだと考えて漢方医学を受診しているわけです。

ということは、西洋医学の患者さんがどんどん増えたとしても、恐らく漢方医学の患者さんが減ることはないのではないか。これが、漢方医学の伸びている理由だと私は考えています。

漢方薬の効かせ方

●漢方薬の適応状態

それでは、本題の「漢方薬の効かせ方」に入ります。漢方薬を良く効かせるにはどうしたらいいのでしょうか。当たり前のことですが、漢方薬の適応状態に投与すれば効果があるのです。不適応な状態で投与すれば、効果がないどころか、まれに副作用が出てしまいます。ですから、漢方薬を効かせるために一番大切なことは、漢方薬の適応状態を明確にして投与することなのです。

ところが、ここで１つの問題が出てきます。それは、漢方薬の適応状態は西洋医学とまったく異なっているということです。これが、漢方医学が難しいと思われている、あるいは嫌らしいと思われている最大の理由になっています。

はっきりいうと、漢方医学を怪しいと思っている方はかなり多いと思います。実は、私は漢方医学を30歳くらいから始めたのですが、始めた当初は怪しいと思っていました。それは、西洋医学の基準で考えたからです。西洋医学の基準からみると怪しい、胡散臭いと思ってしまうわけです。

いずれにしても、漢方薬は西洋医学と異なり、東洋医学的な適応状態で投与しなければ効かせることができないわけです。そこで、漢方薬の東洋医学的な適応状態をどのように考えていくのかについて、その基本的な病態や考え方についてお話しします。

●日本漢方の「口訣」

まず１つの例を示します。女性向きの漢方に焦点を当て、女性につきものの生理痛について考えてみましょう。

生理痛は嫌ですよね。なんで女性に生まれてしまったのだろうかと思われている女性もいます。この生理痛に効く漢方薬は、結構あります。代表的なものとして、当帰芍薬散、桂皮茯苓丸、桃核

資料を使って分かりやすく解説

承気湯が挙げられます。

この３つがどういう状態に効くのかというと、当帰芍薬散は、冷え症、むくみやすいなどの状態に、桂皮茯苓丸は、冷えやのぼせがあり、小太りなどの状態に、また、桃核承気湯は、のぼせやいらいら、便秘などの状態に効きます。つまり、症状が全部違うのです。それぞれの症状の患者さんに対して合う薬を使って初めて、生理痛が良くなるのです。

それでは、症状だけ分かっていればいいのかというと、その症状を把握するのが結構難しいのです。そこで、同じ症状や同じ病気に対して異なる治療が行われます。これを漢方医学では「同病異治」と呼んでいます。

実は、日本漢方には「口訣」というのがあります。それは、こういう患者さんにはこういう薬を投与しなさいという言い伝えのことです。例えば、「美人を見たら当帰芍薬散」という口訣があります。それは、いったいどういうことなのか。まったく西洋医学的ではないですね。後ほど、その解答を示していきたいと思います。

●漢方の治療法の特徴

漢方の治療法の特徴の１つは、先ほどの「同病異治」です。同じ病気や症状に対して、いろいろな治療や漢方薬があるということです。

もう１つの特徴は、「異病同治」です。これは異なる病気や症状に対しても同様の治療を行う。違う症状に同じ薬を使うということです。つまり、１つの漢方薬でいろいろな病気や症状を治療できることを意味しています。

これは漢方薬の大きな特徴であり、西洋医学ではこのような発想はあまりないと思います。ただし、同じ薬で違う病気に使うことができるようになったという例はあり、その代表例がバイアグラです。バイアグラは降圧剤だったのですが、ED治療薬として使われています。

いずれにしても、漢方薬の場合は、いろいろなところに治療できるというのが大きな特徴になっています。

●「異病同治」の例

この「異病同治」について、漢方薬がいろいろな治療に使えるという例を示してみましょう。

まず、葛根湯は、感冒の初期に使われ、肩こりにも使われます。感冒の初期で、寒気が強くて関節痛があって汗が出ない、なおかつ、肩がこわばったようになって肩こりを起こした場合、治療する薬として葛根湯が使われるのです。私は、葛根湯の使用法として、「ぞくっと肩こり葛根湯」といっています。

また、清上防風湯は、ニキビに使われることが多いのですが、実は感冒の初期、特に熱性感冒に使うこともできます。香蘇散は、胃腸虚弱感冒に使われますが、冷えによる胃痛、胃もたれ、不安・無気力感などにも使うことができます。呉茱萸湯は、本来は頭痛に使われるのですが、生理痛や冷えの下痢などにも使えます。

実際の院外薬局では、この「異病同治」が問題になることがときどきあります。例えば、ツムラの清上防風湯の効能・効果の欄には「にきび」と記され、参考（使用目標＝証）として、「比較的体力がある人の、顔面および頭部の発疹で発赤の強いもの、化膿しているものなどに用いる。青年者の面皰」とあります。面皰とはニキビです。ところが、私は清上防風湯を風邪の初期に使ったり、花粉症に使うことがあります。そう処方すると、院外薬局から確認の連絡が入ります。「先生、患者さんはニキビではないのに、清上防風湯を出して

います」。患者さん自身もネットで調べます。「清上防風湯はニキビの薬ではないか。私はニキビではない。風邪なのに、なぜ出しているのか」と院外薬局に問い合わせるわけです。それで「おかしい」ということで私のところに電話がかかってきますが、漢方の効能・効果として書かれているのは、よく使う、多く使うことであって、これだけに使うというものではないと話し、納得していただいています。

もう１つ、十味敗毒湯は、化膿性湿疹、じんましんに使われるのですが、これも風邪に使うことができます。風邪とは書かれていませんが、使えます。十味敗毒湯をよく使うのは、寒冷じんましんです。寒さを温めて、かゆみを抑える。その構成内容からみると、寒性の感冒に十分使うことができるのです。寒気が強い感冒です。漢方医学的な病気の把握・考え方では、寒冷じんましんと寒気が強い感冒は同じなのです。同じだから、同じ薬で治療できるのです。

●「方剤」と「生薬」の意味

では、「同病異治」や「異病同治」がどうして可能になるのでしょうか。

それは、漢方薬が多種類の生薬で構成されているからです。たくさんの生薬が組み合わさった漢方薬を「方剤」といいます。葛根湯、五苓散、八味丸、というような名前が付けられています。

それに対し、西洋薬は１種類です。西洋薬には商品名がありますが、漢方薬はOTCで売っている商品以外、歴史的なものには商品名はありません。

葛根湯がいつできたかというと、いまから約1000年以上前の紀元２～３世紀、卑弥呼の時代です。そこから延々と使われ続けてきたのです。

先ほどの「方剤」の「方」というのは、並べ方、やり方、技術・わざ、調合する、を意味します。２つ並べたものを「方」というわけです。一方の「剤」は、横の二本棒、刀です。刀で切りそろえるというところから「剤」という字が生まれました。そして、切りそろえたものを並べておくところから、「方剤」という名前が付いたわけです。葛根湯は、葛根、麻黄、桂皮、芍薬、大棗、甘草、生姜の７つの生薬から成り立っています。

では、この生薬の「生」とは、どういう意味なのでしょうか。「生」とは、①生まれながらの、新しい、②煮炊きをしていない、③混じりけのない、④精製していない、というのが本来の意味です。つまり、「生」というのは手が加わっていないということなのです。

それでは、なぜ生薬というのか。実は、生薬は明治以降に翻訳された言葉なのです。ファーマシーを翻訳した言葉で、薬になる前の薬ということで「生薬」という言葉を使いました。それ以前は、東洋医学では「生薬」といわず、「本草」といっていました。そこに近代の西洋医学が入り、自然界のいろいろな物質から薬は抽出できるということで、抽出される前の植物のことを「生薬」といったわけです。それがいつの間にか、生薬学に定着したのです。

もう１つ、意外と知られていない用語として「頓服」というのがあります。「頓」という字は、ずしんと頭を地面につけるという意味です。ずしんと頭を地につける音でドン。腰をおろして短時間停止することを「頓挫」といいます。急に死んでしまうのは「頓死」。「頓服」というのは、一回でどんと処理する、という意味です。

●日本の美人の産地の共通点

先ほど、美人の独特の口訣があることを紹介しました。そこで、その口訣から漢方医学の考え方をみていきましょう。

まず、「美人を見たら当帰芍薬散」という口訣についてですが、美人といえば、日本には美人の産地があります。秋田美人、京都美人、新潟美人、博多美人、そこにもう１つ、私としては福井美人を加えたいと思います。秋田、新潟、福井、京都、博多の共通点は、すべて日本海側であるということです。

また、読売新聞に、ポーラが女性の肌の美しさを都道府県別にランキングした「ニッポン美肌県グランプリ」が掲載されていました。その美肌ラ

ンキングでは、トップは島根県で、以下、山梨県、高知県、岡山県、秋田県、山形県、宮城県、東京都、鳥取県、長崎県の順番でした。そのほとんどが日本海側なのです。

なぜそうなのでしょうか。日本海側は冬に雪が降ります。雪が降るので湿気があり、肌が潤ってきます。つまり、潤沢、もち肌になってくるのです。そして日差しが弱いわけです。日差しが弱いと色白になってきます。また、寒いことから冷え性が多くなってきます。美人とくれば、竹下夢二の美人画。なよなよとした感じで、胃弱でスマート。そういった人に使うのが当帰芍薬散、というのが、この口訣の意味なのです。決して顔の形がどうだということではありません。

高知県は雨量が多く、美肌ランキングでは上位ですが、美人の産地とされないのは、寒くないからです。日差しは弱くなく、色白ではないことから美人の産地とは言い難いわけです。一方、福井県は日本一雨天が多いところだといわれています。そこで、敢えて福井美人を入れました。

●「美人を見たら当帰芍薬散」とは

それでは、当帰芍薬散はどうしてそのような人に使うのでしょうか。当帰芍薬散は、当帰、芍薬、川芎、白朮、茯苓、沢瀉で構成されています。当帰、芍薬は全身を滋養し、止痛します。川芎も痛みを止めます。白朮、茯苓は消化力を高め、水分を除き、沢瀉も水分を除きます。つまり、身体を温め、消化機能を良くして痛みを止め、余分な水分を除くわけです。これが当帰芍薬散の構成、働きです。

当帰は小さな花で、芍薬は昔から「立てば芍薬」といわれ、よく知られています。川芎はセリ科の植物で強烈な臭いがし、花は当帰に似ています。白朮はオケラといわれています。茯苓はマツホドといい、松の根元に生えています。キノコのサルノコシカケの一種で、これを食べると仙人になるといわれています。

口訣との関係をみると、冷える、水分が停滞している、消化力が低下している、滋養分が低下しているといった症状に当帰芍薬散を使えばいいわけです。例えば、冷え性や生理不順、めまい、胃弱にも使え、むくみやすい状態にも使えます。繰り返しますが、いろいろな状態に使えるのは、様々な漢方薬から構成されているからなのです。

●当帰芍薬散を投与した症例

実例をみてみましょう。30歳の女性で、主訴は生理痛、冷え性で、生理のあと１～２日間下腹部が痛くなり、温めると良くなる。生理は28日周期で４日間、生理のときに足がむくんで下痢しやすくなる。いつもは過食で胃がもたれ、空腹時に軽度の胃痛があり、げっぷも出る。右背部に痛みがあり、下痢をしやすく倦怠感がある。初診は２月で寒い時期でした。やせ型で、皮膚の色は白く、潤っています。脈は細く、舌質は肥大して歯形があり、薄紫色をしていました。

この女性は、当帰芍薬散を使う典型的な症状に苦しんでいたのです。東洋医学では、冷える、生理の量が少ないのは、身体の中の滋養分が不足しているからだと考えます。生理中に胃腸が弱くなることがあります。生理のときに胃がもたれたりするのは、消化機能が低下しているからだと考えられます。むくみやすく、肌が潤っているのは、水分を溜めやすいということです。

そこで、当帰芍薬散を投与しました。また、消化機能が低下しているので、それを治療した方がいいだろうということで、六君子湯という薬を一緒に投与しました。すると、胃部の症状は良くなり、生理痛もほぼ軽快しました。

●女性向けの薬が多い漢方医学

西洋医学は男女の区別はありませんが、東洋医学は男女を区別します。そして、東洋医学では女性向けの薬が非常にたくさんあるのです。

昔の医学書の条文をみると、加味逍遥散は生理が良くないとき、甘麦大棗湯は泣きわめいたりする女性にいいとされ、当帰芍薬散は妊娠したときにいいと書かれています。ツムラの手帳には妊娠中の諸病に使うと書かれています。西洋医学では

副作用が心配という妊婦には、漢方薬は妊娠中でも大丈夫ですと説明しています。

女神散（ニョシンサン）は、産後に使います。特に産後ノイローゼでイライラしてしまうとき、女神散は優れた効果を発揮します。産後の肥立ちが悪く、体力が低下して疲れて仕方がないときに使うのが芎帰調血飲です。産後のすべての病気にいいと書かれています。温経湯は更年期障害で冷えてしまったときにいいと書かれています。

このように、漢方医学には女性向けの薬がたくさんあるのです。

「証」とは何か

●「証」の例について

以上、漢方薬には様々な薬があり、こういう症状の人にはこの漢方薬、という話をしました。このように漢方薬を使うための症状を取りまとめたものを東洋医学では「証」といいます。漢方薬使用の根拠となる症状のまとまりのことです。

例えば、疲れやすく、食欲不振で、すぐに風邪をひき、朝起きられず会社を休むといった体力の弱い人を「虚証」といいます。仕事をばりばりして、風邪をひいたことがなく、残業しても疲れず、二日酔いをしたことがないといった丈夫で健康な人は「実証」といいます。

また、寒がりで、旅行中は絶対温泉でゆったりしたい、クーラーが大嫌い、夏でも温かい飲み物を飲む人は、身体が冷えているということであり、これを「寒証」といいます。逆に熱がりで、長湯は駄目、夏より冬の方が体調がいい、冬でもアイスを食べてしまう人は熱を持っており、「熱証」というのです。

当帰芍薬散を「証」という考えでまとめると、冷えているわけですから「寒証」、水分が停滞していることを「痰飲証」、消化力が低下していることを「脾虚証」、滋養分の低下していることを「血虚証」と呼んでいます。つまり、当帰芍薬散の「証」は、寒で、痰飲で、脾虚で、血虚の人の「証」だとまとめられるわけです。

聴講者のそばに行って講演する三浦先生

●「証」と西洋医学の症候群の違い

「証」について、もう少し詳しく述べます。「証」とはそもそもどういう意味なのでしょうか。「証」は本来「證」、つまり「登る」と書きます。登ってくればいろいろなことが明らかになる。明らかになることが「証」なのです。日本語では「あかし」と呼んでいます。東洋医学の考え方を用いて病気の状態をはっきりさせたもの。すなわち、東洋医学の疾病認識であり、この「証」によって漢方薬が投与されるわけですから、漢方薬の適応基準をはっきりさせたものということになります。

それなら、西洋医学の症候群（Syndrome）や疾病（Disease）と同じではないかと考えられがちですが、実は違います。「証」は自覚症状や他覚所見からつくられています。その自覚症状は絶えず変化しているのです。昨日はここが痛かったのが、今日は頭が痛くなる、というように、「証」は変化することを前提としています。ですから、処方も変化していくのです。

つまり「証」は診察した時点の東洋医学的な疾病認識なのです。これが西洋医学の病名、疾病、症候群との違いです。今日の診察では「あなたは頭痛です」、翌日行ったら「盲腸です」、３回目は「肺炎でした」となれば、西洋医学では信用してもらえないでしょう。しかし、東洋医学では、診察した時点と後で変わっていっても構わない。それが東洋医学の大きな特徴です。

例えば、風邪の場合で、関節通や肩こりがあれば、葛根湯を使います。しかし２～３日後に食欲

聴講者の熱気に包まれた会場

がなくなれば、小柴胡湯を使います。さらに２～３日後に咳が出てくれば小青竜湯を使う、というように変化していくのです。これが東洋医学のやり方です。

65歳のＯさんは、疲れやすく、風邪をひきやすく、食欲不振でもたれ感があり、すぐに下痢をしてしまう。つまり、消化機能や肺機能が低下し、全身の生命力が低下してしまっているとまとめられます。これが東洋医学の「証」なのです。そんなＯさんには六君子湯を投与するといいのです。

●「虚証」と「実証」

発病の仕組みについて、東洋医学では２つのパターンで病気が起こると考えられています。

１つは生命力、抵抗力の低下です。つまり元気がなくなった。これを「虚証」と呼んでいます。「虚証」の「虚」という字からは「虚しい」を連想しますが、本来は住居の窪んだ跡のことで、そこから、空っぽ、虚ろという意味になりました。ですから、「虚証」とは、本来あった「正気」、生命力や抵抗力が失われた状態なのです。

一方、体力はあり、元気なのに病気が起こるのは、何かが身体の働きを邪魔したということになります。邪魔するもの、有害物のことを「邪」と呼んでいます。この有害物は何かというと、１つは外からやってくる寒さや熱さ、湿気、もう１つは、身体の中に厄介な有害物ができてしまう場合があります。西洋医学でいうガンに相当するものです。外からやってきたもので体内に有害分ができ、身体の働きを邪魔してしまうと、体力があっても発病していまいます。これを東洋医学では、「実証」と呼んでいるのです。

例えば、健康な24歳の野球選手が、６月にサーフィンをした後、かき氷を食べた。その１時間後に腹痛と下痢が続いて、来院しました。普段は健康だけれども、かき氷という食物の寒さによって下痢をしてしまった。丈夫で健康であれば病院には来ませんが、何らかの原因で病気になったから病院に来る。これが「実証」なのです。

「実証」の「実」という字源は、家の中にお米や財産がいっぱいあることです。そこから、ふさがる、充実する、いつわりない、という意味になりました。では、何がいっぱいあるかというと、「邪」という部分、つまり有害物が体の中にいっぱいある。これを「実」と呼んでいるのです。

まとめますと、東洋医学では、生命力や抵抗力の低下によって起こる「虚証」の治療の原則は、失われてしまったものを補ってあげることです。養生の原則は、弱いところを元気にしてあげればいいわけです。

一方、有害物の「邪」によって機能が阻害されて起こる「実証」の治療方法は、有害物を取り除けばいい。養生の原則は、悪いものを避ければいい。例えば、毎日お酒を飲んだために胃が悪くなったら、養生のためにはお酒を断ったり、少なくすればいいのです。

つまり、「虚証」と「実証」が、治療原則、病体の基本でもあるし、治療や養生の原則にもなっていくのです。その東洋医学の考え方、治療原則を端的に表現しているのが「屠蘇散」です。「屠」というのは邪（有害物）をほうむる、「蘇」というのは生命力を蘇らせる。この２つの言葉で治療原則、養生法原則を表しています。

●東洋医学の「血」とは

もう少し話しますと、次のような相談がありました。四物湯を処方された患者さんがネットで調べたら「血の不足」や「血虚」に使用されると書かれていました。しかし、その患者さんはヘモグ

ロビンが13あって貧血ではない、それなのになぜ四物湯が処方されたのだろうかというのです。

その答えはこうなります。ネットで調べた「血の不足」「血虚」というのは東洋医学の理論、東洋医学の病名であって、西洋医学の「貧血」とはまったく違うということなのです。

東洋医学の「血」というのは滋養、栄養分のことであり、栄養状態を指しているわけです。西洋医学の「貧血」は、東洋医学的にいえば、「血虚」と「気虚」という病態で把握されることが多いのです。ですから、西洋医学と病気に関する考え方がまったく違うのです。そのことを認識していただければと思います。

●東洋医学の基本的な病態把握

「寒証」と「熱証」は、あまり難しくありません。実例を紹介すると、47歳で、５年くらい前から発汗を伴う熱感がある。ほてってしまうというのです。その患者さんは10年前から異常な冷感と浮腫があり、当帰芍薬散の服用で良くなりました。現在も服用中ということです。そういう人が来院しました。色白で、整った顔をしている美人で、まさに当帰芍薬散が合っていると思われる患者さんでした。

そこで、私は当帰芍薬散の服用を中止させたのです。そうしたら、良くなりました。当帰芍薬散は温める薬です。ずっと飲んである程度、体が温まって良くなった。にもかかわらず飲み続けていたため、体が熱を持ってしまって「熱証」に変化し、ほてってしまったのです。

いわゆる薬の副作用ということです。漢方薬にも副作用はあります。私の研究では、100人のうち１人～３人くらいは副作用が出ます。

それで、「寒証」と「熱証」についてですが、体が冷たいのを「寒証」、体が熱いのを「熱証」といいます。

東洋医学の基本的な病態把握は、「虚証」と「実証」という生命力と有害物による把握と、「寒証」と「熱証」という寒性と熱性による把握の４つがとても重要になります。この４つの症状によって語られることが多いのです。

●お湯と冷たい水のどちらで服用するか

もう１つ、相談事例を紹介します。漢方薬はお湯と冷たい水のどちらで服用した方が良いでしょうか、という相談です。

答えは、原則２つあります。１つは、「寒証」の人、体の冷えた人は、温かいものを体が好むのでお湯がいい。一方「熱証」の人は、冷たい方がいいのです。もう１つの原則は、漢方薬は苦いですから（実は苦くないのもあるのですが）、そのときにあまり冷たい水で服用すると余計苦さを感じたりします。逆に、熱いと飲み切れない場合もあるでしょう。だから人肌がいいのです。人肌の湯で服用すれば、最も苦みを感じずにすっと飲めます。いずれにしても、結局、患者さんの好みでいいのです。冷たい水と温かいお湯の飲みたい方で服用すればいいのです。

湿布の例もそうです。温湿布と冷湿布どっちがいいのか。冷やした方がいいのか、温めた方がいいのか。炎症があり、冷やして気持ちが良ければ冷やした方がいいのです。

つまり、気持ちがいいことは体にもいいのです。これが医学の大原則であると思っています。

東洋医学はこれからの医学

最後にまとめになりますが、東洋医学には西洋医学にない独特の病態観と治療方法があります。今回は触れませんでしたが、東洋医学は日本の医療文化に根ざした医学体系なのです。ですから東洋医学を理解することは、ある意味、日本人の疾病感に触れることでもあります。

今後の新しい医学の地平を開いていく上で、秘めた力があるのではないか、と私は考えています。ひと言でいえば、東洋医学はこれからの医学である。非常に古い医学であるけれども、いま必要とされている医学であるといえると思います。

これで本日の話を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。